

北海道の自然の魅力——その第一に阿寒をあげる人が多いようである。美幌峠の雄大な眺め、妖しい神秘の摩周湖、原始林のなかに眠るペンケトー、パンケトー湖などが人々の心をとらえるのであろう。ところがある人は、日没のサロベツ原野の荒涼美が一番だという。ある詩人は、荒々しい襟裳岬の岩礁と怒濤を推している。近頃では知床の秘境が最高だと、主張する向きが多い。これらの地域はいわゆる箱庭的日本風景とは異なり、大陸的で「静」あるいは「動」の原始的な相を保っており、訪れる人々に休養を与え、感動を呼び起こさすのであろう。本道の各地には、これらの地域に準ずる国立、国定、道立自然公園地域も数多く指定されているが、急速に観光開発が進みはなはだしく汚染されつつあることはまことに残念に思う。これら秀でた自然地域の保全は現在の日本人のためにも、また将来の人々のためにもきわめて重要なことであり、とくに、本道に住むわれわれの重大な責務であることをご痛感する。私は最近視察した支笏洞爺、阿寒国立公園地域を対象として森林保全に対する私見をのべてみたい。

自然公園地域における 森林風景の保全

——支笏洞爺、阿寒を対象として——

高橋延清



支笏湖地区

札幌管営林局が昭和四十年三月に、観光資源開発調査報告書（支笏湖、定山溪地区）を発刊している。これは管内自然公園地域における林業経営と森林の観光的利用の調整をはかり、極力国民大衆の要望に添うためのいろいろな企画、今後の方針などが意欲的に書かれている。私が視察した支笏湖周辺に関する限り、おおむね適切なプランが設計されており、そのプランが将来とも着実に実践されることを心からねがうものである。

支笏湖は、いずれの方位より眺めても山

環境——自然美にその特色があるように思う。その特色を破壊しないで、できる限り保全することが何より大切であり、開発の諸事業もこの一点に集約してことが運ばれねばならない。保全問題は複雑多岐にわたるのであろうが、私は主に森林とその施業問題についてのべてみたい。

支笏湖のモーターラップよりポロピナイにかけての背景の森林は、巨大な広葉樹の原生林であり、春より夏にかけて緑一色の世界であり、秋ともなれば全山紅葉して湖水と調和がよく保たれ、人の心に安らぎを与えその鮮やかさは湖面にも反映するであろう。

ポイントで接近して見るとかなりの急斜地であるところ崩壊しているところもあり、

将来ともこの地区は禁伐として保全すべきであろう。崩壊地はさらに拡大しないように、目立たぬ方法で手当てをして、復元を計ってほしいものである。

モーターラップより美笛にかけては地形もゆるやかであり、かつてエゾマツ、トドマツの巨木が生い繁り、神秘的にして幽玄な環境を与えた原始のブラックフォレストであったが、昭和二十九年の十五号台風の被害で全く破壊され、残念ながら昔日の面影が全くない。しかし十年以上経った今日では密生する稚幼樹群が天然更新しており、人為的なコントロールで、昔の姿に徐々に復元することは技術的に可能である。

トドマツ、エゾマツの稚樹群を被圧しているダケカバ、ナナカマド、オガラバナ、ハンノキなどの広葉樹を適当に伐採して、

極盛相的林相に誘導すべきであろう。いまのまま放置していても自然美は感じられな
いし、醜くすらある。とくにシジャモナイ
団地はトドマツ、アカエゾマツが風害後に
一斉に更新し、学術的にも貴重なものであ
る。地形のゆるやかなこの団地に、ゴルフ
場を設定したいという動きもあるらしいこ
とを耳にしたがとんでもないことと思う。

ゴルフファーにとってここでプレーできる
ことは、それは気分が良いに違いないが、
ゴルフをやらぬ人間にとっては、はなはだ
しく印象が悪く、迷惑であろう。この団地
はあくまでブラックフォレストに復元して
支笏湖の幽玄な美しき、静けさを一層とり
もどさなくてはならぬ重要な地区である。
また車道と湖水に挟まれた細長い湖畔の森
林も、風害や道路建設で破壊され、現在の
状態では醜さが目立ち、風致林施業を積極
的に行なう必要がある。

対岸のポロピナイ、丸駒温泉、オコタン
べ川口にいたる背景の森林（恵庭岳山麓）
は、針、広混交の巨木の存在する原始的な
林で、深くて濃い青色の湖面とマッチして
幽玄境をかもし出している。

前記したように支笏湖の外輪山内の遠望
は、美しい森林によってとり囲まれ、静け
さが秘められた自然環境であるが、この恵
庭岳山麓地区だけはポートで接岸して眺め

ても、いや森林の中にはいつても、森林の
極盛相の素晴らしい美しさと静けさがある。
将来の貴重な遺産のためにも、全力をあげ
て保全してゆきたいところである。

札幌市の石山よりポロピナイにいたる札
幌、支笏湖線のハイウエーが目下建設中
で、支笏湖から五十分で支笏湖に達するとい
うから、いままでの秘境ポロピナイは一変して
湖畔にかわり、支笏湖の表支開口になりか
ねないし、ここにいかなる性質の集団施設
地区が設けらるべきものか、いなかは大い
に検討を要する問題である。ねがわくば、
近くの定山溪や洞爺湖の雰囲気とはかけ離
れたもの静かな休養地として、すべてにデ
ザインと工夫をこらしてもらいたいもので
ある。

オコタンべ川口より清流を登ると、営林
署が架線集伐機を利用して仕事をしている
現場を通りぬける。やがて右手に急峻にし
て男性的な恵庭岳の山膚と、森林植生のう
つりかわりの変化を眺めながら数キロの歩
道を登りつめ、眼下にエゾマツ、トドマツ
など針葉樹原始林におおわれた未開発のオ
コタンべ湖の真の原始秘境を眺める。鴨が
泳いでいる。この地区は特別保護地区にな
っており、鳥獣や植物はもとより一切の自
然景観がそのまま保全されるわけであるが
歩道を降りて湖岸に達すると、缶詰の空き

缶などが澄んだ湖底に投げ捨てられており
まことに残念である。

さて、前記の営林署が択伐でなく、皆伐
方式で直営生産事業を行なっているところ
は、ネマガリダケの密生しているところで
択伐による天然更新がすこぶる困難であり
また機械化作業の場合、択伐方式ではソロ
パンにのらない理由からやむを得ず皆伐方
式をとったものと思うが、急峻なこの地区
は現在、第二種特別地域に指定されている
が、いかなる方式で施業を実践していくこ
とがよろしいか、あるいは一歩進めて、景
観維持を最優先として第一種特別地域に編
成替えすべきものか、再検討の要があるう
（皆伐方式の直営生産事業は、この地区で
今後行なわれない方針が局より指示されて
いるとのことであった）。

目下、オコタンべ川口からオコタンべ湖
の東側を通る産業開発道路が建設されつつ
あり、やがておびただし観光客がこの地
区を通り抜け、車をとめて美しい自然景観
を眺めることであろう。

国立公園地域における森林の施業の仕方
は、特別保護地区、第一種特別地域、同第
二種あるいは同第三種ごとに、それぞれに
応じた規程範囲内で施業を行なわねばなら
ないが、規程には一般原則が簡単に記され
ているだけであるから、実践にさいしては

重大なミスを犯さぬよう、とくに慎重を期
する必要がある。

このためにも、自然公園地域内を管理経
営する営林署や林務署の職員、とくに現地
の担当区主任に対して、特別の研修を行な
う必要がある。適任者は希望あらば同地
区に永年勤続とし、かつ優遇の道を講じて
もらいたいものである。

さて、私は支笏湖地区二日間の視察のあ
と、美笛より大滝村をへて洞爺湖に向か
たが、途中は濃いガスのため、周囲の風景
はほとんど見られなかった。

久しぶりに洞爺湖畔について、すっかり
熱海化したメロデーの流れる俗っぽい霧
囲気がすべてに優占していることに驚く。
支笏湖の落ちついた静けさと、美しい深遠
な眺めは全く感じられない。やはり洞爺湖
の背景となる外輪山の山々には、もう美し
い森林はなく、農耕地が拓け、奥行きな
いなんとなく落ちつかない眺めである。た
またま小雨となり、ガスがでて、対岸のみ
にくさが消え、中島が墨絵のごとく浮か
んで見える風景は、一瞬素晴らしいものであ
った。

ロープウエーに乗り、昭和新山を眼下に
そして洞爺湖の眺めは雄大であった。有珠
岳の頂上近くに設けられたロープウエーの
終点に達したころは、ガスで何も見えな

ったが、驚いたことに道産子らしい馬が三頭、柵の中に飼われている。話を聞くと、なんでもここから有珠岳の頂上附近の周囲を、馬で乗りまわして楽しんでもらう計画をたてているとのこと、全く驚いた話である。三原山と間違えているらしい。

有珠岳の山頂近くには、ゾツとする大崩壊地があり、現にその下方に大被害を与えている。この地帯は非常にくずれ易い地質でとても馬を通すような道路をつけるわけにはゆかないし、ドサンコの馬で原野を乗りまわすのはまだ風情があるとしても、こんなところで馬を見ることが興ざめである。

また特別保護地区となっている銀沼に、白鳥を飼う計画も考えているという。これも、自然に白鳥がやってきて住んでいたことがあるという話はずつだが、私の目にはどうしても白鳥にはそぐわない感じのこの沼に、あえて白鳥を飼う計画を考えるのであろうか。白鳥のことは、あるいは人によって議論の分れるところかも知れないからまだしも、馬の場合のように金もうけのためなら、あたりかまわずやろうとする商魂には義憤を感じざるを得ない。少なくともこの計画の申請に対しては、断固としてはねつけてしかるべきものであろう。

洞爺湖の俗化はますますひどくなるであ

ろうが、支笏湖は洞爺湖の二の舞いをふむことなきよう、あくまで自然環境をできるだけ保全することに留意し、すべての立場の人々が相協力して観光開発が進められることを心から念願するものである。

(以上は七月十九日と二十一日の間、支笏、洞爺を視察した内容を、同下旬にとりまとめたものである)

阿寒国立公園地域

八月十八日より三日間、阿寒国立公園地域を視察した所感をその順路をおって、以下述べてみたい。

昭和九年に指定された阿寒および大雪山国立公園については、国立公園法による地域区分が厚生省と林野庁との間において、まだ確定されていないことは不思議なことであり、また不適切なことと思う。阿寒公園地域の地域区分について、昭和三十七年、厚生省国立公園局および林野庁、帯広営林局の合同現地調査がなされているが、厚生省は未告示のままである。公園局計画課の人手不足が主たる原因であろうが、厚生省と林野庁は意見の疏通を欠いており、お互いに不信感があるように思われる。

国立公園地域の開発は、現在急テンポに進められつつあるので、超スローモーの決

定では間に合わないし、また一度決定した
ことでも時代の移り変わりで再検討しなけ
ればなるまい。たとえば現に新しい観光道
路がどしどし開発され、そして温泉開発や
ホテルの申請もあろうし、また、マイカー
族がふえて大きな駐車場を至急設けねばな
らないような場所もある。先を見越した
具体性のある計画を決定しておかなければ
問題がおきても適切な行政指導ができず、
チグハグなものとなる。

野中温泉附近よりオンネトー湖周辺は、
黒色の感じがするアカエゾマツの原始林が
多く、背景の雌阿寒岳の白赤色の山膚と調
和して、独特の雅致ある風景美をかもし出
している。林床はモス型であつて、上木の
伐採によりアカエゾ、トドマツともに更新
しているが、トドがきわめて優勢である。
ササ林床のところではトドマツのみ更新し
て、アカエゾマツは倒木などの上にのみし
か更新していない。

現在の道路幅より、左右五〇メートル幅
が第一種相当地帯になっているが、将来道
路幅が拡大される可能性があり、少なくとも
八〇メートルくらいまで拡大することが景
観維持上よいと思われる。また第一種相当
地帯においては、できる限りトドマツを大
中、小にわたり除伐して、アカエゾ主体の
林相を保持しようコントロールしたほう

が良いと思う（全く自然放置主義者は反対
であろうが、少なくともこのままでは人為
的破壊をきっかけとして、アカエゾの林は
ほかのものに移り変わるであらう）。

双湖台にこのたび行き帰りと二回立ち寄
った。最初のときはやや曇りがちの日でベ
ンケ、パンケの両湖の大森林のなかに眠れ
るがごとく静けさを保ち、無限の広がり
と深さをもった幽玄境を感じた。ところが、
帰りに再び双湖台に立つてみると、バスか
ら降りてきた女学生の一団が「やあ、素晴
しいわね」といいながらパチリパチリと写
真をとっていた。一人が、あれ、林の中に
タンザクのようなものが二つ見るといっ
た。伐つたあとだらうねと誰かが言った。
ある学生が、「いや、あれは鬼の下駄の跡
だ」といったので、皆ドツツと笑った。
このときはちょうど雨上がりでカラッと
晴れ、遠望のきく日であつたので、前の日
に気づかなかつた伐開地の跡が鬼の下駄跡
のように目についたとたんに、私はなんと
もいえない気持になった。大げさにいえば
いわば一幅の名画に傷をつけてしまったよ
うなものである。少なくともここ数年十
年間は、あの伐採地の傷跡は消え失せない
だろう。

ベンケ、パンケをとり囲む周囲の大森林
は、過熟老令のクロエゾ大径木が主体で、

ほかにトドマツ、広葉樹が混交している極
生相の森林であるが、林床はクマエザサで
占められ、天然更新の作業がうまく行か
ないところである。

択伐作業（ヌキ伐り）による天然更新が
ほとんど期待されないので、営林局が小面
積の皆伐の試験地をつくった場所が、たま
たま双湖台より見える結果となつてしま
たのである。営林局としては、この地域は
第二種特別地域（択伐の場合は伐採率三〇
％以内、皆伐の場合は一カ所二ha以下の規
程）に該当するが、風景を維持しながら林
木を伐採して収益を上げざるを得ない事情
もある。現在考えられるいろいろなや
り方を実験中であるから、やがて適当な施
業方法が発見されるであらう。私もその試
験地を見学させてもらったので苦心のほど
は了解できるが、少なくとも双湖台と双岳
台の道路より遠望される範囲は将来とも風
致林施業に徹してもらいたいものである。

阿寒より弟子屈にぬける、いわゆる横断
道路と呼ばれる道路沿いの森林はクロエゾ
マツ、トドマツの老径木にサルオガセが
付着し、林床にササが密生して特有の風情
をかもし出しているが、中層、下層を占め
る後継樹木群がほとんどなく、更新上から
は全く不安定な相である。やがて、現在の
老径木はほとんど枯死してゆき、ササ山

と化する恐れがある。殺風景なササ山も、
場所により美しいものであるが、目立たぬ
ようにエゾマツ、トドマツなどの幼稚樹の
更新を図ることが望ましい。

弟子屈より摩周湖に登る道路の両側に苦
勞して造成したトドマツ、エゾマツの造林
地がある。標高の高いところは厳しい寒風
害のため造林は容易でなく、造林すること
により、かえって不自然さを感じさせる。
登りつめて急転直下、パターンは一変し、
眼下に見える妖しげな神秘の摩周湖をなが
められるが、その前景としてむしろササ一
面の広々とした荒涼的な北海道的な眺めが
効果的でさえある。

摩周湖の尾根づたいに行く観光道路の地
帯はダケカンバ、ササ型植生地帯で、特有
の美しさがあり、将来ともこの組み合わせ
の景観維持がポイントであらう。しかし、
摩周湖より川湯にむかつてくだる観光道路
の、いわゆる弟子屈町美留和の森林は、第
一種特別地域相当地域になってはいるが、
傾斜地でトドマツ、エゾマツが若く、とき
には再生林などの下層を占め、全体として
針、広混交林である。現況においてそれ自
体をながめて、とくに美を感じない。
こういうところは、できるだけ人間の手
を加えて天然林をコントロールして、成長
量の増大を図りながら美しい優良大径木の

生産を図るよう、施業することが適切である。そして天然更新法による森林経営技術の弊をここに表現して、一般国民大衆にお見せすることが効果的であり、真のサービスタともいえるであろう。風致と生産性の高い健康的な美林に仕上げるために、むしろ現在の第一種特別地域を第二種に変更したほうがより適切と判断される。

硫黄山のハイマツ、イソツツジの群落が大規模に枯れている。よく観察してみると上方から流出してくる硫黄のまざった砂で押しつぶされて木が弱り、二次的に病、虫害を誘発して枯死していくのである。ここは観光資源的にも学術的にもきわめて貴重なところであるから、少なくとも空中から写真をとり、現況を把握しておくとともに、さらに自然の植生のうつり変わりを調べる固定した調査区の設定が望ましい。

現在シラカンバがどしどし増大して、ハイマツやイソツツジを被圧してゆく方向に進行しているが、やはり観光資源の保持という立場からは、シラカンバの侵入をある程度コントロールすることが良きそうに私は思う。自然尊重主義者はそのままほっとくことが絶対で、全く手をくわえてはならないと主張しているようだが、私はいまのままの景観をできる限り維持することがより賢明だと判断する。流出する砂は適量など

ころで防ぎ、ほかにトラックなどで運んで行くことが良いのではなからうか。いずれにしても、それぞれの専門家が集まって現地で協同診断して、今後の方針を決定しておく必要がある。

屈斜路湖畔の第一種特別地域で、某代議士が関係しているとかいう「某農園」が無断で他人の所有地を強引に埋めたり、厚生省の許可なしに湖畔の林床に土を運んでしまった行為は全く不当である。

それについても、自然公園法に公園計画（保護と利用）を決定しなければならぬと規程されているが、昭和九年設立の阿寒大雪国立公園には公園計画の構想はあっても、確定計画がまだにないという。民間より事業したい計画が出されても、それを検討し適切に指導することが容易でない。基礎調査がなされていないからである。厚生省、公園部計画課に人が足りないためであろう。

藻琴峠からの眺めは、知床半島の尖端より大雪山まで雄大そのもので、美幌峠は問題でないという人の話を聞いた。そして、原生花園から藻琴を越えて川湯にはいるコースがやがて開発されるといふ。清水水町では小清水峠としたいらしいが、弟子屈側では藻琴を主張しているとか。利害に関係のない私どものような第三者の立場からは、

モコトという名称のほうが、なんとなしに阿寒にふさわしいイメージを与えてくれるように思う。小清水峠では内地的イメージを与えるであろう。

自然公園地域における山火対策

観光利用者の増大によって森林風景はますますおびやかされてくるが、北海道の自然公園地域において、森林にたいし最も決定的な恐威を与えるのが山火事である。

山火の予防対策については、従来単に標識やポスターや言葉だけの訴えの感じが強く、効果はあるとしても、自然公園地域についてはとくに万全の策が講じられねばならない。四月六月、春の危険期には、管轄の営林署や担当区の職員は、山火事の防止に神経をすりへらして警戒にあたっていることはお気の毒なほどであるが、地元の協力は積極的なところもあるが、一般には、お座なりの協力にすぎないところが以外に多い。今年の春、道主催の北海道林野火災予防対策会議に筆者も出席し、つぎの提案を行なった。

山火対策は春の危険期においては、なるほど全道どこでも重要なことであるが、なんとなくポイントのない形式主義の感じをうける。少なくとも重要文化財をとりかこ

む森林地区、自然公園地域、とくに重要な保安林地区、学術研究林地区などに対して山火予防特別警戒地区を設定して強力に保全してもらいたいことを提案した。この特別地区に対しては、山火予防のため必要な経費は国、道、関係地元市町村、利益をうける業者などにおいて、それぞれ負担することが望ましいだろう。

§

「北海道自然保護協会誌」の創刊にさいし、各専門の立場の人が手分けして執筆することにになり、編集会議で北海道の森林景観保全の問題については、森林美学の専門家である今田敬一先生におねがいすることになった。ところが、先生は多忙でお引き受けできないというので、私が執筆せざるを得ない羽目になった。まことに貧乏くじを引いたものである。

なぜなら、一般の企業的な森林施業は私の専門であるとしても、風致林施業は正面のところよく解らないのである。支笏洞爺阿寒の地域を営林局にいろいろご便宜を図ってもらい、一とまわりして、しかもその印象を遠慮なく書いたものである。これも本道の自然公園地域における景観保全が、将来に向かつていかに重要であるかを深く感ずるがゆえであり、その善意を了解していただきたい。（東大・北海道演習林員）